

日本ユーラシア協会とは
旧ソ連邦に住む諸国民
との相互理解と友好を
進める(旧)日ソ協会
の統一した名称



НЕТ ВОЙНЕ!

日本とユーラシア Япония и Евразия

愛知版 NO.676

HP: <https://eurasia-aichi.beet.jp>

ニュース、投稿は下記へ
〒461-0004
名古屋市東区葵1-22-26
日本ユーラシア協会愛知県連合会
電話 052-508-4368
Mail: eurasia_aichi@yahoo.co.jp

第10回 サモワールを囲むお茶会 報告 服部 和

2月15日(日)午後1時からロシア語教室で「第10回サモワールを囲むお茶会」を開催しました。11時半からペチカの会員による準備が始まりました。手狭なロシア語教室を机の位置を変え、クロスをかけて、お皿は紙皿、ティーカップは事務所のありあわせですが、パーティ会場に。今回は変圧器を買っていただいたので、電圧を100vからロシアの200vに上げて、教室に飾られているロシア製のグリーンのサモワールでお湯を沸かすことができました。小さなポットに濃い紅茶を作り、カップに少量注いで、サモワールの下部についている蛇口から熱湯を注いで好みの濃さにします。これが面白くて、参加者のみなさんは並んで、順番にそれぞれ自分のカップに紅茶を注いでみました。

今回のゲストはサラトフ州出身のロシア人、小川マリアさんです。2年前にもお茶会のゲストに来ていただいています。今回も夫で弁護士の小川さんといっしょに来てくださいました。年末とお正月をロシアで過ごして1月に帰ってこられたばかりで、今は直行便がないので中国経由で帰国され、天候が悪くて時間もかかり、モスクワからさらに飛行機で1時間半、サラトフ州のガガーリン空港からまた車で3時間という遠いところにお住まいのご両親にやっと会えたというお話をうかがいました。参加者はほとんど受講生と元受講生でした。



まず自己紹介から始めて、ロシア語学習歴や趣味の話、マリアさんへの質問など少しずつロシア語で話をして、テーブルに並んだコケモモ入りのケーキやキノコのパイ、ロシア風のピーツのサラダ「ヴィネグレット」などを食べながら、最初は緊張気味だった方もリラックスしていろんな話ことができました。マリアさんからは薄い生地に蜂蜜を塗って重ね、上に生クリームを絞ったおいしいケーキ「メダヴィーク」を差し入れにいただきました。ペチカの長瀬さんからはロシアのお茶会の定番というスーシキという塩味のお菓子や「小鳥のミルク」というマシュマロとチョコレートのお菓子の差し入れもあり、みなさんにロシア料理に欠かせないピーツやディル（ハーブ）も試食していただくことができました。最後に記念写真を撮って、ジブリスタジオの作品が好きでこれからジブリパークに行かれるというマリアさんご夫妻をお見送りして、楽しいお茶会は終わりました。

サモワールお茶会 参加の感想

清水 貴子



2000年2月のウラジオストク旅を機にロシアへの興味を強めた私は、協会の語学クラスを受講し始めました。しかし超難解な文法に阻まれ語学習得は進まず、ロシアへ気軽に旅行できる状況も見通せず、寂しい気持ちでいました。

そんな時に参加した「サモワールを囲むお茶会」では、サモワールやホフロマ塗りの器とともに紅茶や軽食を味わい、色々な方のロシアあれこれ話を聞き、素敵な非日常空間を体験することができました。学習のモチベーションも回復！楽しい会をありがとうございました。

サモワールお茶会 参加の感想

受講生 M



サモワールを囲む会で、ロシア料理やお菓子を楽しみながら、ロシア出身のマリアさんとお話することができ、非常に楽しい思い出となりました。マリアさんは、私の拙いロシア語での挨拶や自己紹介を丁寧に聞き取ってください、簡単なロシア語で返してくださいました。それがとても嬉しかったです。

ただ、私のロシア語力ではロシア語で会話するにはまだまだ力不足で、もっとロシア語を勉強しなければならないと思いました。本場のロシア語はスピードが速く、とてもかっこよく感じられました。いつか私もあのくらいの速さでロシア語を話せるようになりたいです。

また、ロシアのご家族の写真をを見せていただいたり、お祖母様のお宅にサモワールがあったという貴重なお話を伺ったりしました。サモワールはソ連やロシアの生活に密着した家電であったことを実感しました。

サモワールは装飾が非常に繊細で美しく、使うときはとても緊張しましたが、紅茶はとても美味しかったです。

ご準備いただいたロシアのお菓子もどれも大変美味しかったです。特に、以前から一度食べてみたいと思っていたスーシュキが印象に残っています。ロシアのお茶会といえばスーシュキというイメージがあり、どんな味なのだろうと長い間想像を膨らませていましたが、期待以上の美味しさでした。甘さが控えめで、何個でも食べられそうでした。紅茶だけでなく、さまざまな飲み物にも合うお菓子だと思います。

ロシア語再び 岩本 美佐子

年末のユーラシアフェスティバルでタチアーナ先生に私のように高齢になってからロシア語を再学習した人はいるかと尋ねるとあの人も、この人もと指さして言われた。戦争を起こしたロシア政権ではあるが、ロシア語を通じてロシア人とつながりたいという人が多くいることも知って私の再学習の「動機」は正しかったとうれしくなった。

ロシア語との始まりは中高生時代。当時洋画漬けの日々、映画評論家気取りの同級生と競って映画館に通っていた時、ソ連映画「Гамлет」に出会った。上下左右ひっくり返ったキリル文字！低くどろくようなりズム、モノクロの鮮烈な映像。若い好奇心はこの映画を作った「ソ連」に突進した。日ソ協会のロシア語講座に5年通い、お世話になった多田さん、植村先生、難波先生、新美先生、そして仕事帰りの男性受講者に混じって夜の講座は労働者の夜学的雰囲気であ楽しかった。

しかし当時はロシア人との日常的交流はなく、たまに名古屋港にソ連の貨物船が入ると船員との交流会に出かける程度。ソ連旅行も2回行ったがチェコ侵攻などもあり次第に遠ざかってしまった。

50年以上もたち、ロシア語講座のチラシを見てパッとスイッチが入り、4月から無謀にも会話クラスCに飛び込んだ。基礎知識はあっても会話のキャッチボールは1、2歳レベル。語尾変化でつまったら終わり、と語尾をうやむやにしたり、日本語では、英語では、を連発して苦し紛れの会話。それをエレーナ先生は想像力を豊かに「幼児」の言いたいことを正しいロシア語にまとめて下さる。受講に付き合っ下さる服部先生の手助けがあっても理解は半分以下。聞き取れなかった言葉は耳にしまい込んで1週間考える。これが楽しい。

ロシア語習い始めに付き合ってくれたのは老犬ニーナだった。日々弱っていくニーナの横で教材を並べ、CD、ラジオを聞いて過ごした。9月になくなったとき「ロシア語モノにするからね」と約束した。のだが12月に新しい元気な犬が来てこの先怪しくなった。

時を越えて届いた金メダル

—ウズベキスタンでの種が花開くとき— 世古 元伸

二十数年前、青年海外協力隊員として派遣されたウズベキスタンの首都タシケント。私は障がいを持つ子どもたちの学校で、自立支援のため日本式のマッサージを教えていた。

教え子の一人に、ロシア人の少年セリョージャがいた。十代半ばだった彼は聴覚障がいを抱えながらも聡明で、私の不慣れなロシア語や手話を補い、献身的にクラスを支えてくれた。

しかし活動を終えて帰国し、二十年の歳月が流れる中で、現地の記憶はいつしか遠い思い出の断片となっていた。

そんな私のもとへ昨年、予期せぬ電話が入る。送り主は、東京で開催していたデフリンピック（聴覚障がい者の国際スポーツ大会）で、ボランティアとして各国選手のマウスピース製作をしていた歯科医師だった。

「ロシア代表の空手選手が、どうしても会いたい日本人がいると探しています。セルゲイという男に心当たりはありませんか？」



23年前の授業風景（教えているのが私で、シャツを着てマッサージをしているのがセリョージャです）



現在のセリョージャ

半信半疑でSNSを通じ連絡を取ると、画面の向こうに現れたのは、紛れもなくあの「セリョージャ」であった。

送られてきたメッセージには、たくましく成長した彼の近影と、二十年前の私の授業風景を写した一枚の古びた写真が添えられていた。彼はその後ロシアへ移住し、空手の道で国家代表にまで上り詰めていたのだ。

「あなたにどうしても会いたかった。」

その言葉に胸が熱くなった。見知らぬ土地へ渡り、環境を大きく変えながら彼がどれほどの努力を重ねてきたか。私が教えたマッサージが直接空手に結びついたわけではないだろう。しかし、彼が二十年間大切に持ち続けてくれた写真と、今まさに彼が手にしているまばゆい金メダルの輝きが、かつての私のささやかな活動が彼の心の灯火となっていたことを教えてくれた。

蒔いた種は、想像もつかないほど立派な花を咲かせていた。まさにЧудо（奇跡）と呼ぶべき再会は、私にとって人生最高の出来事となったのである。

セリョージャ、君の歩んできた険しい道のりに敬意を表して。

Я горжусь тобой！
（君を誇りに思うよ！）

ロシア語は『やさしい』か 受講生 R.N.

皆さん、こんにちは。「NHKのロシア語先生格好いい!!」そんなミーハーな子供時代からロシア語に憧れ、幾星霜。よき先生と級友に支えられながら何とかついていってるロートル受講生です。

ところで皆さん、ロシア語は「やさしい」と思いますか。名詞の性、多彩な格変化諸々・・・「易しい」というのは少し難しいかもしれません。ですが、ロシア語はとても「優しい」言語なのです。頼れる講師の手を借り、文法の壁を一つ乗り越えるたびに、自分の力が上がったのを感じてきました。ロシア語は、努力した人を裏切らない、そんな、優しい言語なのです。

現在はロシアの優れた文学を読む講義を受けています。素晴らしい日本のロシア文学者が見てきた世界を、文学に造詣の深い山崎先生と一緒に体験しています。原文で読む事で得られる物語への没入感、原文でしか判らない韻の美しさ・・・これも（金箔よりも薄い）勉強の積み重ねからロシア語が私にくれた「優しい」世界だと思っています。

そんな「やさしい」ロシア語の世界に、一步踏み出してみませんか。

カザフスタンを訪問して⑨ 寄宿制学校 白村 直也

第1番特殊寄宿学校を訪れたとき、ここが単なる「学校」ではないことはすぐに伝わってきた。廊下には子どもたちの声があり、教室の外にも生活の気配があった。授業と同じように、食事や休息の時間が大切に組み込まれている。ここは学ぶ場所であると同時に、暮らす場所でもある。

この学校には約600人の生徒が在籍しており、子どもたちは市内各地から通ってくる。寄宿舎で生活する子どももいれば、送迎バスで通学する子どももいる。寄宿舎には家庭で暮らすことが難しい子どもたちもあり、男女別のフロアに設けられた一室三名までの部屋で日々を過ごしていた。

在籍する子どもたちの障害は一律ではない。知的障害や自閉スペクトラム症、ダウン症など特性はさまざま。教員に加えて心理士や障害学の専門家が配置されているものの、人手が足りないという話は、これまでに訪れた他の学校でも繰り返し耳にしてきたことだった。

授業の中で印象に残ったのは、「ものづくり」の時間だった。レゴブロックを手に、子どもたちは思い思いに形を組み立てていく。完成した作品そのものよりも、考え、試し、やり直す過程が大切にされているように見えた。卒業後、多くの生徒は大学ではなく、職業教育を重視した進路を選ぶという。さらに必要に応じて、社会適応訓練センターという職業訓練校で、二九歳まで支援を受けることができる。教育は、学校の中で終わるものではなく、その先の生活へと続いていた。

校舎を歩きながら、ふと日本の特別支援学校のことを思い出した。日本にも寄宿舎を併設した特別支援学校はあるが、近年では寄宿舎の閉鎖が話題になることがある。家庭や地域で育つことが理想とされる一方で、その負担が家族に集中してしまうのではないかという不安も拭えない。寄宿舎という仕組みは、時代遅れの制度として語られがちだが、ここで見た光景は、その単純な評価をためらわせた。

寄宿制は、子どもを家庭から切り離す装置なのか、それとも社会が子どもを引き受ける一つの形なのか。その答えは簡単には出ない。ただ、この学校で生活と教育を同時に支えられている子どもたちの姿を見ていると、社会がどこまで責任を引き受けるのかという問いが、静かに浮かび上がってきた。ここもまた、社会への橋渡しの途中にある場所なのだと感じながら、校舎を後にした。



生徒の作品

新栄の窓から 本多 まゆみ

この機関紙のあなた宛帯封の右側に⑩、★や2512～の数字や記号が記載されているのにお気づきですか？ロシア語講座受講生には教室番号の①から⑫まで。例えば⑩は「会話B」の教室番号です。手渡しで郵送不要。★も郵送不要。2512～とは「2025年12月～の会費を入金してください」。それぞれの意味ある表記です。何も記載のない会員もいます。

この4月から本格運用していく予定ですが、郵送代金節約と会費納入記録のために取入れます。特に「帯封記載のとおり会費期限が近いです。納入してください。振込用紙同封しています」という取組にしていきます。会員全員の会費が滞りなく集まることが、会の運営が明るく進む一歩です。事務方の準備等整えていきます。ぜひ、ご意見ご要望などお寄せください。なお、退会のときは、退会月までの会費を納め、必ず事務所に連絡してください。